

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 城間 知子 所属: 沖縄県立那覇特別支援学校 記録日: 2018年 2月 4日

キーワード: 重度重複障害、OAK、肢体不自由、コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年

○小学部 6年生 女児

・障害名

○両側シルビウス裂周囲多少脳回症 多発奇形 (肢体不自由 知的障がい)

・障害と困難の内容

○骨折しやすいことから、常時仰向けで経過しており、気管切開、胃ろうによる水分・栄養の摂取、持続吸引と医療的ケアを必要とする児童である。表情はあるが、関わる人によって解釈が異なり、快・不快などが判断しにくい。

【活動目的】

・当初のねらい

- ① 2016年度の実践より得られたことを参考に、共有できると対象児のコミュニケーションが広がるだろうと思われることを、仮説を立てて検証する。
- ② ねらい①で得られたことを、対象児と関わる人と共有する。

・実施期間 ○平成 29年 5月～12月

・実施者 ○城間 知子

・実施者と対象児の関係 ○学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

【魔法の種の実践でわかったこと】

(1) 魔法の種 (2016年度) の実践で、さまざまな刺激を伝えた時の前後の反応を観察することで、対象児の動きを大きく二つのグループに分類することができた。

○音楽 (サザエさん) を聞いていた時の反応の様子

音楽を提示する前

音楽を提示している時

音楽を止めた時



図1 音楽 (サザエさん) を提示したときの OAK 画像 (それぞれ 20 秒間の動きの量を色で表している) 音楽を提示中に、提示する前と比べると顔や足の動きが減少している。また音楽を止めた時に音楽提示中と比べると顔の動きが増えている。(黄色の○と比べると赤の○の中は、白の色が多いので、身体の動きの量が減っていると判断できる。) 音楽 (この場合サザエさんの曲) に集中しているので、音楽提示する前後に比べると提示中には、動きが減少しているのだろうと考えた。これは、この刺激を感受しているのではないかと捉えた。

○右手を触った時の様子

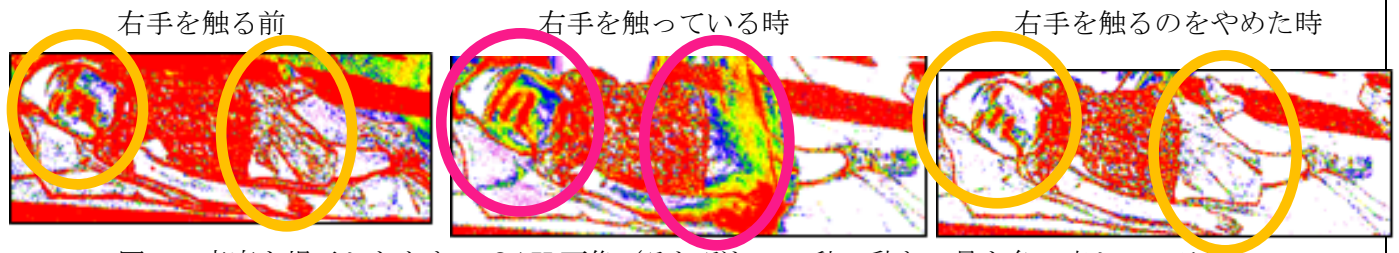


図2 音楽を提示したときのOAK画像(それぞれ10秒の動きの量を色で表している)

○右手を触った時、触れる前と触れるのをやめた時を比べると顔と腰あたりの動きが増加している。右手を触っている時には、緊張し顔や腰の動きが増えているのだろう。(黄色の○の部分と赤の○の部分と比べると、赤の○の部分で赤や黄色青色の色が多くあるので、動きが増加していると判断できる)

さまざまな刺激を伝えると上記のような代表的な動きが見られた。このことから対象児の動きを二つのグループに分類することができた。



表1 刺激に対する身体の動きについて



	身体の動きが減少した	身体の動きが増加した
身体 の 動 き	<ul style="list-style-type: none"> ・微笑む ・左側の刺激に対して、左へ首を動かす。 ・視線を左へ向ける。 ・視線がとまる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・顔全体を緊張させる。 ・首の動き、視線を左右に動かすことが増える。 ・身体全体が小刻みに動く。 ・呼吸が速くなるまたは力が入り呼吸が数秒止まる。
刺 激	<ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼ばれる ・キラキラテープを見る ・音楽(サザエさん)を聞く。 ・トランポリンの揺れ(※揺れの大きさからだの固定に注意が必要) 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃが急に目の前に現れる ・車いすの移乗 ・右手を触られる ・担任が教室から出る ・耳元で新聞紙を破る

それらの状況から考察すると、その刺激を感受している時は身体の動きが減少するだろう。刺激を遠ざけた時には身体の動きが増加するだろうと考えた。

(2) 刺激の種類によって、対象児が受け入れやすい提示方法があることがわかった。

表2 刺激の種類による提示方法

刺激の種類	対象児が受け入れやすくなる刺激の提示方法
視覚刺激	<p>提示するものを左側から40cm程度離して提示する 40cmより近くに提示すると、目をぱちぱちとまばたきをしたり、身体全体を緊張させる反応がある。 また、右側から提示すると、視線が合わないことが多い</p> 
聴覚刺激	<p>提示するものを30cm程度離し、小さな音量からだんだん大きくする 大きな音を30cm以内でならずと、身体を緊張させる反応がある。</p> 

<p>前庭覚の刺激</p>	<p>揺らす前に言葉かけをし、小さな揺れから始める ※身体の一部だけが揺れないようにする。 言葉かけなしに揺らしたり、大きな揺れをすぐに伝えると身体全体を緊張させる反応になる</p>	
<p>触覚刺激</p>	<p>触れるものを見せて言葉かけをして肩等（右手以外）に触れる 言葉かけなしに、手を触れると身体全体を緊張させる反応になる。</p>	

(3) 対象児が好きだと教師が考えるものでも、その日の体調やその日の興味に感受するのか、緊張する反応になるのか、変化することが分かった。

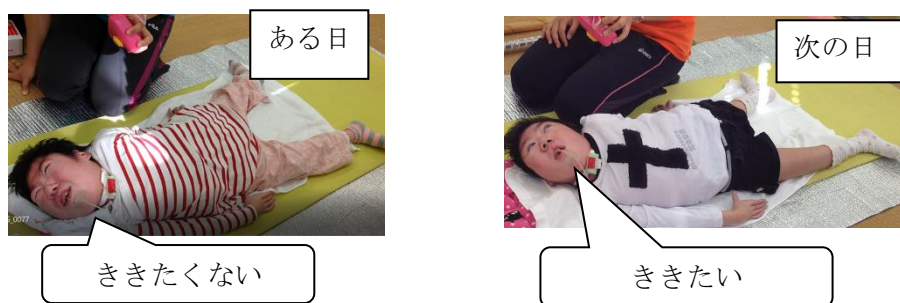


図3 日によってやりたいやりたくないが変わる

【まだわからないこと、不十分なこと】

身体の動きで二つに分類することができた。また、その日のその時々で反応を観察しコミュニケーションの大事さを知ることができた。一つずつ丁寧に刺激を提示した時に、身体の動きの増減の起因になった刺激は提示した刺激であることが考えられる。しかし、**実際のコミュニケーション場面で身体の増減で対象児が表してくれた時の起因がわからないこともあり、対象児が表現しているのに読み取れないことも多い。**

関わる時間の多い担任やクラスの職員とは、緊張と安心を区別し共有できつつあるが、隣接するセンター職員は毎日担当が変わるため**関わる時間が少ないことから、緊張している状態だと思ふときも「笑ってるね」と判断することが見られる。**また、学校の中でも他職員も同様のことが見られる。

・活動の具体的内容と対象児の事後の変化

ねらい①

2016年度の実践で得られたことを参考に共有できると対象児のコミュニケーションが広がるだろうと思われることを、仮説をたてて検証する。視覚や聴覚、触覚刺激を伝えた時の反応の変化についてと環境が変化することへの反応について、カメラ機能を活用し、OAKのモーションヒストリー（一定の時間の動きの量を可視化できる機能）で確認した。


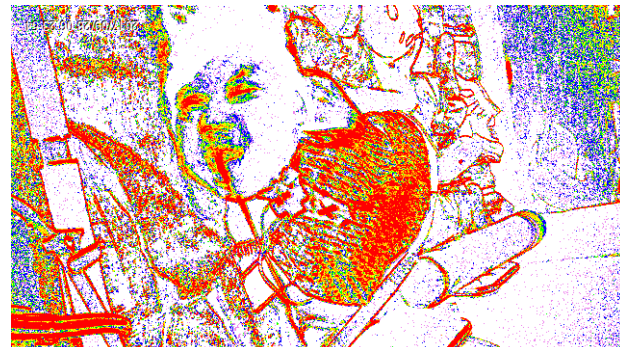


○ 活動の幅が広がることをねらいにした教育活動を進めていく中で、仮説の修正・更新作業をすることができるのではないか。

仮説の検証

仮説① 薄暗い教室で、ブラックライトをつけると変化に気づき、顔全体に力が入り、呼吸が速くなるだろう。

表3 薄暗い教室でブラックライトをつけた時のOAK画像(それぞれ20秒間の動きの量を色で表している)

薄暗い教室	ブラックライトをつける
	
呼吸がゆっくり 顔全体を緊張させる様子はない	呼吸がはよくなる 顔全体を緊張させる

考察

ブラックライトをつける前とブラックライトをつけてからのそれぞれの20秒間をOAKのモーションヒストリー(一定の時間の中の動きの量を可視化できる機能)にかけてところ、ブラックライトをつけて20秒間の方が、胸のあたりや目、鼻、口で赤や黄色が多くなっている。

このことからブラックライトをつけることで、**仮説の通り**、顔全体を緊張させたり、呼吸が速くなり、身体の動きを増やしていると考えられる。よって環境の変化に気づいたことを身体の動きを増やす事で伝えていると思われる。

仮説② iPhoneの動画を左側から提示すると、対象児は**動きが止まるだろう。**

表4 iPhoneの動画を見せた時のOAK画像(20秒)

iPhoneの動画を見せる前	iPhoneの動画を見させている
	
呼吸はゆっくり 顔全体を緊張させる様子はない	呼吸はゆっくり 顔全体を緊張させる様子はなく 首や視線を何度か動かす

考察

iPhoneでの動画を見せる前と見せている時とそれぞれ20秒ずつOAKのモーションヒストリー(一定の時間の動きの量を可視化できる機能)にかけてみた。すると動画を見せる前と後では、見せている時のほうが

目、口、鼻の動きが多くなっている。また胸のあたりは、iPhoneを見る前の方が少し赤くなっている。

このことから呼吸は動画をみている時に少しゆっくりになり、顔をうごかしていることがわかる、集中して見るので、身体の動きが止まるだろうと仮説を立てたが、**動きが止まるのではなく、何度か首や視線を動かした。**これは見ようとして身体の一部を動かしていると解釈した。

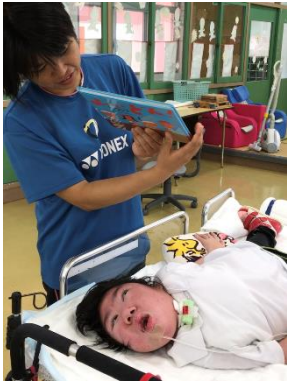
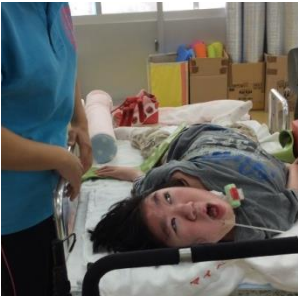

○ 仮説の検証を通して、対象児の身体の動きを再度分類した。

提示した刺激に対しては、身体の動きを増減させることで反応していることがわかった。仮説の検証を通して、遠ざかりたいと思われる時には仮説通り、身体全体の動きが増加していると思われる。

感受していると思われる刺激に対しては、動きが止まると仮説を立てていたが、首や視線だけを何度か動かす動きがあることが分かった。

そこで対象児の刺激に対する動きは三つに分類できることが分かった。

表5 刺激に対する身体の動きの分類

	身体の動きが減少	身体の動きが一部増加	身体の動きが増加
反応	<ul style="list-style-type: none"> ・左側へ視線を向けて止まる 	<ul style="list-style-type: none"> ・左側へ首を動かす ・左側へ視線を動かす ・微笑む 	<ul style="list-style-type: none"> ・身体全体に力が入る ・呼吸が速くなる ・身体全体が小刻みに動く ・瞬きが多くなる ・膝の動きが多くなる 
刺激	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本をよんでもらう ・淡い光を提示する ・担任やクラスの先生、保護者がそばにいる。 ・鈴の音色 ・名前を呼ばれる ・iPadで動画を見る 		<ul style="list-style-type: none"> ・鳴子、タンバリン ・突然の明暗の変化 ・右手に触れられる ・絵本や顔を近づきすぎた時 ・車椅子や畳への移乗

ねらい②

ねらい①で得られたことを、対象児と関わる人と共有する

5月下旬

○聞き取り

- ・対象児が何に笑っていて、何に緊張しているかがわからない。(隣接する施設職員より)
- ・対象児の何を見て、快、不快と判断していいかわからない、これがわかればコミュニケーションがしやすくなる(他学級の教師)

→この意見を受けて、受け入れやすい刺激の提示の仕方を共有できればと思い、対象児のベッドサイドにiPad miniを置き、iPad miniで対象児の情報を写真や動画に説明を加えて発信していき

いと考えた。iPad よりも iPad mini は小さいので設置しやすいと考えた。

○共有するための環境づくり

6月～7月上旬

- ・iPad mini を隣接する施設の対象児の部屋に置いて、対象児の学校での様子を知らせたいことを隣接する施設職員に相談する。
- ・医療的ケアの妨げになるのではないかと、落としてしまったり、壊してしまったり、盗難に遭ったらどうするのか、落としてしまった時対象児に当たる可能性があり危険でないか等の心配があり、設置に対して不安を感じている。(隣接する施設職員より)

7月中旬

- ・不安なことについて→

隣接する施設の職員対象児の学校の様子や反応の変化を知らせたいことを伝え、落としたり、壊したりしたときに責任を問わないことを伝える。

- ・場所の検討→

落ちてしまった時に対象児があたらないところで、対象児に関わる職員が見える所を検討。固定具を用意し再度お願いする。

- ・許可が下り、下記の写真のように設置してもらう(隣接する施設職員が設置してくれた)

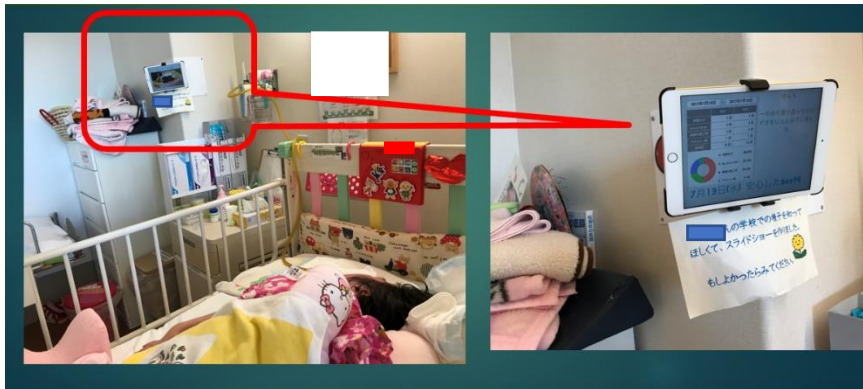


図4 対象児の部屋の設置方法

- ・ベッドサイドに iPad mini を設置し、iPad mini で Keynote を活用し対象児の情報を写真や動画に説明を加えて発信した。

→実際に設置できたので、実際に伝えていく実践を行った。



図5 iPad mini で提示した画像

12月

→これらの映像を見ての関わる職員の反応を、聞き取りをおこなった。

→共有するとコミュニケーションが広がるであろう場面をkeynoteで作成し、対象児の病室に設置した。

参考になったという意見もあった。しかし、提示する方法や時間等が不十分でなかなか見る事ができなかったという意見もあった。対象児の反応や関わり方について共有することへは、提示方法等課題があることが分かった。

・主観的気づき

言葉でのコミュニケーションが難しい対象児との2年間の実践で、4つの気づきがあった。

1 対象児の反応を、刺激を一つ一つ提示し、提示する前、提示中、提示を止めることで確認する。

【実践を行う前の関わり方】

実践前は、刺激を伝えて何らかの反応、動きを引き出そうとするあまり、余計な言葉かけをおこなったり、音を付け加えたりと、本人にとっては混乱するようなこと、捉える私たちにとっては何に反応しているのかわかりにくいことをしていた。

【実践後の関わり方】

実践後は、音声なら音声、視覚刺激なら視覚刺激と一つ一つ丁寧に、刺激を提示する前後と比べることで、対象児が身体の動きを減少させたり、一部分を増加させたり、身体全体の動きを増加させたりすることで、その刺激に対して、感受の仕方を示してくれていることに気づいた。(図1、図2、表1、表5より)

2 対象児の気づきを引き出す刺激の提示方法を確認できた

【実践を行う前の関わり方】

実践前は、なんとなくそれぞれの刺激を提示していた。

【実践後の関わり方】

実践後は提示するときに、一つ一つ丁寧に提示した、また身体の動きの増減での刺激の感受の仕方を知ることで、視覚刺激、聴覚刺激、前庭覚に訴える刺激、触覚刺激を、緊張を和らげ、対象児の見たい、聞きたい、触ってもいいよがわかる提示方法に気づくことができた。(図1、図2、図3、表2、表5より)

3 対象児とのコミュニケーションをとるとき、その都度問いかけることの大切さに気づくことができた。

【実践を行う前の関わり方】

刺激を提示した時、一度笑えばその刺激に対しては、好きだと判断し、毎日提示していた。

【実践後の関わり方】

対象児が好きだと教師が思っていたものが、その日の体調や興味によって、受け入れられない日もあることに今回の実践で気づくことができた。刺激を感受しているだろう身体の動き、遠ざけたいと思っているだろう身体の動きを確認し、その都度、提示の仕方を工夫し、聞くことで対象児も安心してコミュニケーションをとることことに気づくことができた。(図1、図2、図3、表2、表5より)

また絵本やiPadなど視覚刺激については、1年目の実践で身体の動きを減少することだけが感受している反応と思っていたが、仮説の検証をすることで、身体の一部を増加することも感受している反応であることがわかった。日々、丁寧に対象児に聞いていき、確認していくことを継続し、思い込みで対象児を読み取らないことが大切であることが分かった。(表3、表4、表5より)

4 多くの人との共有することの大切さ

対象児とのコミュニケーションを拓げるために、保護者、隣接する施設職員、学校職員へ、対象児が身体の動きを減少、または一部増加、身体の動きを増加させることで、それぞれの刺激について感受するだろう、

遠ざけたいと思っているだろうことを iPad mini を活用し、Keynote で動画を中心に伝えてきた、映像があることで、伝えやすい部分もあったが、伝える時間、方法に課題があり、伝える工夫が必要であることが分かった。（図4、図5、仮説②による実践より）

・今後の見通し

- 対象児はその日によって感受する刺激と感受しない刺激がある。コミュニケーションの取り方（刺激の提示の仕方）に気を付けて、その都度の反応を見ていくことが大事である。
- 首を左に回旋する反応が、刺激を感受する反応として捉えることができるだろう。この動きをコミュニケーションの発信に活用できないかを検討する。
- iPad mini の設置以外に、どのように学校内での職員や隣接する施設職員やと共有するかの検討が必要である。